

# 歴史の中の 女たち

## 第 35 回

バルトリーナ・シサ  
(1753 ~ 82 年)

ーアルト・ペルーの反乱ー

伊藤 滋子

バルトリーナ・シサはもの心がついた時にはすでに行商を営む両親に連れられて、ラパスを中心とするアルト・ペルー（現ボリビア）の村々を旅していた。その頃、先住民は社会の最下層に置かれて村に縛られ、エンコミエンダ（征服地の住民をスペイン人に割り当て、その保護を委託するかわりに、賦役や課税を許す制度）やミタ（公定の日当を支払われる強制労役）の制度の枠組みのなかで鉱山や織物工場、農園などの強制労働に狩り出されるのが普通だった。そんな中でごく一部のものだけがそれをすり抜けてメスティソに混じり、村の人々が作った品物を他の村や町に運んで売り、別の商品を買っては各村や町に立つ市で売るという行商に従事し、エンコミエンダやミタの束縛を逃れていた。

バルトリーナの両親が運んでいた商品は主に生活必需品だが、そのなかでもコカの葉と繊維製品が多い。インカ時代コカの葉は限られた地域でしか生産されず、貴族や首長などごく一部の人々に用いられていたが、植民地時代に入ると、それが強制労働を強いられる労働者たちの空腹を押えるというので、北はエクアドルから南はラプラタまでのペルー副王領全域で消費されるようになり、しかもどの階層の人々にも嗜好され、爆発的に使用量が増えた。ラパス周辺では北東部にあるユンガスがその産地だったが、マラリアなど熱帯特有の病気のために人は住んでいなかった。しかし征服後スペイン人はミタの制度を利用して先住



アルトにあるバルトリーナとトゥパク・カタリの像  
<http://www.panoramio.com/photo/96228798>

民を移住させ、コカの葉の栽培で大きな利益をあげていた。ユンガスは険しい山間の地で、山の斜面を切り開いてインカ伝統の段々畑が造成された。

白人階級が用いる衣服はヨーロッパから輸入されたが、メスティソにはスペイン各地の平民の服装、先住民にはスペインの農民を真似た服が強制され、いずれも現地の材料を使って織られていた。旺盛な需要を満たすために、インディアス各地に多くの繊維工場が建てられ、布地だけでなく、毛布、ボンチョ、テーブルクロス、ショール、帽子もそこで生産される。工場は都市ではなく、羊毛、アルパカ、ビクーニャの毛、後には木綿、麻などの原料が入手しやすく、先住民の労働力が豊富な周辺地域に建てられた。ラパス地方にはそのような繊維工場が沢山あり、そのほとんどはスペイン人やカトリック修道会の経営によるものだった。エンコミエンダに繊維工場を持つあるスペイン人はその収益で、ラパスに4つの教会を寄進したほど儲けの多い産業であった。

バルトリーナの両親はユンガスの山間地に分け入ってコカの葉を買いつけ、ラパスでそれを売り、衣料や繊維品を仕入れていた。最初は自分で背負い、そのうちリャマやロバを使って、アンデスの山岳地帯や高地の平原を旅しながら商品を売り歩いた。バルトリーナも両親に連れられて歩きまわるうちに商売を覚え、11、2才になるとメスティソや先住民の行商人に混じって働き、16、7才の頃には行商人としてひとり立ちして

いた。両親は年をとると、オルロからラパスへ行く途中にあるシカシカに落ち着き、店を構えた。付近には繊維工場やぶどう畑も多く、地方の交易の要所として豊かな町である。だがバルトリナはラパス、ペルーの海岸地方、オルロ、コチャバンバ、ポトシの間をひとりで行商を続けた。街道の要所にはタンボと呼ばれる宿泊所があって、数日の間そこで商売をすることもあった。タンボには旅人ばかりでなく近くの村からも人がやってくるので、互いに顔見知りになり、情報交換の場となった。女性の行商人も珍しくはなく、若い女性が自立して、一人で旅しながら働ける環境があったことは、特筆すべきことである。彼女自身はその仕事のおかげで先住民に課せられた束縛から逃れることができたが、各地で同胞の置かれている過酷な状況を見て強い不満を募らせてゆく。それも白人ばかりか、メスティソ（白人に近い混血）やチョロ（先住民に近い混血）までが加害者側にまわり、かえって彼らの方が、先住民との違いをみせつけるためにより横暴だったのだった。

バルトリナは、同じように行商をしていたフリアン・アパサ、のちのトゥパク・カタリと出会い、結婚する。彼はアヨアヨ周辺の村出身の先住民で、アヨアヨもラパスからオルロに向かう街道にあり、シカシカとも近い。幼くして孤児となり、親戚の手で育てられていたが、村にやってきたアヨアヨの司祭が彼を自分の教会に連れてゆき、鐘つきや聖器係として使った。お陰で彼はスペイン語を話せたが、読み書きはできない。17才になると村に帰されてミタの強制労働に連れて行かれ、2年間オルロの鉱山で働かされた。鉱内で使う道具も衣服も食糧もすべて自前で、しかもそれを鉱内の店で法外な値段で買わされるのだ。親方や兵士たちから鞭と鉄拳で動物のように扱われ、死んだ仲間を葬り、非人間的な感覚でしか生きて行けないような環境のなかで、無事村に帰れる者は少なかった。

幸いにも彼は生きてそこを出ることができたが、神父はすでに亡く教会には戻れず、しばらくパン屋をしたあと行商人となった。それは決して楽な仕事ではなく広大な地域を渡り歩くことでわずかに自由を感じたが、畑、コカ栽培、繊維工場、町の家僕と、居場所は違っても鉱山と同じように奴隷化されている同胞を見るにつけ、自分たち先住民はスペイン人とクリオリヨ、メスティソ、チョロなど他の階級の搾取と圧政の下でしか暮らせず、その仕組みから抜け出せる希望は全くないことを思い知るのだった。フリアンもバルトリナ

と同じような道筋をたどっていたからどこで知り合ったとしても不思議ではない。二人はシカシカで式を挙げ、アヨアヨでも披露宴を催すほどの財力はあった。1770年、彼らは行商のルート上にあるサパハキに住居を定め、以前と同じようにコカや布地の交易を続けた。家庭生活の詳細は不明だが、伝承によれば72年生まれを頭に男3人女1人の4人の子供を得たらしい。

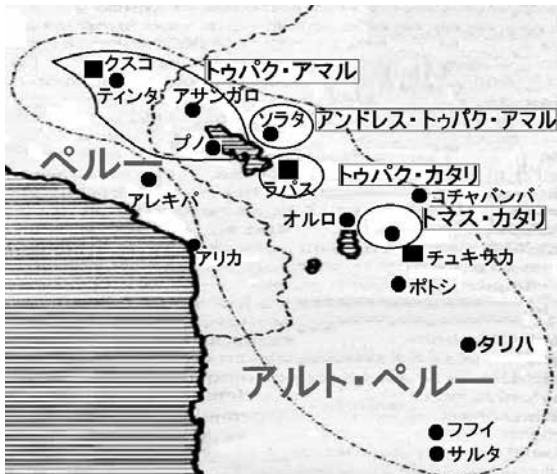
1780年に入ると、ペルー、アルト・ペルーのこの地域でたて続けに先住民の反乱が起こるが、まずその先駆けとなったのがトマス・カタリの乱である。1778年のこと、チュキサカ（現スクレ）やポトシにも近いチャヤンタのコレヒドール（先住民村の行政官）によって不当にクラカ（村の首長、カシケ）の地位を上げられたトマス・カタリはチュキサカの 아우ディエンシア（行政、司法機能に一定範囲の立法権をもつ機関）にコレヒドールの横暴を訴え出るのが取りあってもられない。そこで村人たちはお金を集めて旅費を作り、彼をその前年に新設されたばかりのラプラタ副王領の首都ブエノスアイレスへ送ることにした。

彼は2、3人の仲間とともに出発、スペイン語もできず、道も知らず、途中で出会う同胞に助けられながら、先住民は馬に乗ることを禁じられていたので、2,700kmの道のりを歩いてブエノスアイレスまで行った。そして先住民保護官の助けを得て副王に面会し、コレヒドールの数々の悪行を直訴した。ユカタンのメリダ生まれで、クリオリヨのベルティス副王は同情を示したものの、一方的な訴えだけで裁定を下すことはできず、「チャルカスの 아우ディエンシアは正義に基く措置をとるように」という命令書を与えた。トマス・カタリと仲間は意気揚々とチュキサカに戻るのだが、アウディエン



バルトリナをシンボルとする先住民女性たち

<https://andradetalis.wordpress.com/2012/09/07/bolivia-en-lucha-contra-el-racismo-y-la-discriminacion/>



ペルー・アルトペルーの反乱

シアは結局何の措置も取らなかったばかりか彼を投獄する。暴動を起こしかねない村人の抗議で釈放されて村に帰った彼は、ラプラタ副王の名において、コレヒドールによる商品の強制販売、恣意的な増税、ミタ制度の廃止を宣言した。しかし彼は地方官憲によって捕えられて連行中、断崖から突き落とされて殺され（1781年1月）、この反乱を引き継いだ二人の弟も一時はチュキサカにまで追ったが、やはり捕えられて絞首刑にされた（81年3月、4月）。

続いて全インディアスを震撼させた18世紀最大の、ティンタのトゥパク・アマルの反乱（『歴史の中の女たち』第10回『トゥパク・アマルの妻ミカエラ』参照）がほとんど同時に起こり、トゥパク・アマル以下39人がクスコの広場で処刑される（81年5月）。同じ5月、トゥパク・アマルの甥アンドレス・トゥパク・アマルがチチカカ湖の東にあるソラタを攻めた。

そして、まだトゥパク・アマルの反乱が続いていた1781年3月、バルトリナの夫フリアン・アパサが二人の反逆者の名を取ってトゥパク・カタリと名乗り、中間地点にあるラパス地方で蜂起した。ペルー、アルト・ペルーでこれらの反乱がたて続けに起こったのは決して偶然のことではなく、10年以上の長い時間をかけた様々な模索や話し合いの結果であった。フリアンと妻のバルトリナは何度か北のトゥングスカへトゥパク・アマルに会いに行っているし、南のチャヤンタのトマス・カタリとも接触していた。そして300頭以上のロバを使って運送業を営むトゥパク・アマルは、ペルー、アルト・ペルー、ラプラタ全域を巡っている。カシケの子弟としてクスコのイエズス会学院で教育を受けたエリートである彼は、反乱に至る前に、リマ、クスコのコロニアル政府およびスペイン王に対して、不当な

徴税、コレヒドールによる強制販売、大農園、エンコミエンダにおける先住民の奴隷化、ミタの強制労働などを告発し、植民地の人間がたとえ少しでも国政や地方行政に参加する道を開いてほしいという嘆願書を送ったが、何の回答も得られなかった。一説によればスペインには書状を持たせて弟を派遣したが、その弟は帰途の船中で原因不明の死を遂げている。

3月初め、反乱は瞬く間にラパス地方全体に広がり、トゥパク・カタリはラパスを見渡せるアルトとパンプハシに陣を置き、全ての道路を封鎖し完全に市を包囲した。トゥパク・アマルはクスコを包囲したが、それは完全な包囲とは言い難かったし、カタリ兄弟もチュキサカに脅威を与えただけだったのに引き換え、トゥパク・カタリによるラ・パス包囲は第1期109日間、第2期74日間と計5カ月半続いた完璧な包囲であった。しかしラパスの方もその前年の末から包囲を見越して準備を進めていた。北のクスコと南のチャヤンタが攻撃されているのだから、その中間にあるラパスが無事でいられるとは考えられないからだ。市の周辺に住む住民を市内に避難させ、チュキサカあるいはラ・プラタからの応援が来るまでの間持ちこたえられるように、大急ぎで食糧と武器弾薬を備蓄し、クリオリョ、メスティソも含めた防衛軍を組織し、壕を掘り、見張台を築いた。その時はまだ、周辺の幾つかの先住民村が味方になるかもしれないという期待があったが、包囲が始まると、たちまちその甘い考えは吹っ飛んだ。2万のトゥパク・カタリ軍はまたたく間に4万にふくれあがり、最高時には8万人に達した。畑を耕すために村に残ったのは老人と病人だけで、兵士には家族も一緒についてくるのが昔からの習わしであり、女たちが戦闘に参加することも珍しくはない。ときには1万人もの女性が石の雨を降らせた。バルトリナがスペイン人女性の服を着て、反乱軍の中で『女副王』と呼ばれていることもラパスの人々を苛立たせた。しかも彼女は夫と同等の権限を与えられていて、トゥパク・カタリが戦闘にでかけたりして不在の時は命令を下し、単なる副官というよりも、ほとんど夫の分身として行動していた。だからアルトとパンプハシの二ヶ所に陣が置かれたのも不思議ではない。

包囲の間ラパスにいたオイドールの一人は日記のなかで、防衛体制、緊迫した生活、スペイン人とクリオリョの対立など赤裸々な記述とともに、一段下に見ていた先住民女性たちが男たちと共に勇敢に戦いに参加し、大きな役割を果たしている様に感嘆しながらその

様子を生きいきと描写している。女性を小児並みに扱い、その居場所は家庭の中しかないと思いこんでいた彼にとっては衝撃的な光景だったのだろう。日記にはラパス内の女性の行動については全く言及されていない。もっとも彼は独身であったが...

4月に入ると攻防戦がはじまる。攻撃は市の周りにめぐらされた壕に阻まれそこを越えることはできなかったが、町の周辺部にある藁ぶきの家はすっかり焼き払われた。先住民側には火器がほとんどなく、武力においてはラパス側の方が有利だったが、5月には食糧が底をつく。飢えには勝てず、貴重な牛馬やロバ、犬、猫、果てはネズミまで食べるという深刻な事態に陥り、ラパスは全滅の危機におののいた。だが6月半ば、アルトの陣営にいたトゥパク・カタリのもとに、チュキサカのアウディエンシアの議長フローレスが率いる1,700人のスペイン人救援部隊が近づいてきたという報が入った。トゥパク・カタリは陣をバルトリナに任せ、3,000人を率いてそれを迎え撃つために出かけて行ったが、スペイン軍のよく鍛錬された圧倒的な武力攻撃のまえに蹴散らされ、彼自身も馬を失い、徒歩で逃げた。フローレスは6月末ラパスに入り、包囲は破られた。

1780年8月以来たて続けに起こった反乱に対してスペイン人は武力、組織力、軍事技術、騎馬の数では優位にあるものの、簡単には敵を打ち負かせないことに脅威を感じた。そこで敵の戦意をくじき結束を崩すために、恩赦や賞金を餌に裏切りを促す作戦にでた。その結果、トゥパク・アマルをはじめ全ての首領たちは戦闘ではなく、仲間の裏切りや密告による待ち伏せなどで捕えられているが、バルトリナの場合もやはりそうだった。トゥパク・カタリ軍を破ったスペイン軍は、「蜂起は鎮圧された。首謀者たちの逮捕に協力したのものには恩赦を与える」という噂を敵の間に流布した。明らかに裏切りを誘発しようとするものであった。7月2日、バルトリナはアルトとパンプハシの間を移動中に、敵と通じた味方の手で待ち伏せしていたスペイン人部隊に引き渡され、ラパスの獄につながれた。

8月初め、体勢を立て直したトゥパク・カタリは再びラパスを包囲する。しかし10月半ば、今度はブエノスアイレスの副王から派遣された7,000人の救援軍が到着した。先住民側は川を堰き止めてラパスに洪水を起こそうとしたが、橋がいくつか壊れただけで、壊滅的な被害を与えるには至らなかった。副王軍は次々とトゥパク・カタリの軍を撃破し、アルトばかりかラパス周辺の全域を制圧、トゥパク・カタリはラパスから70キ

ロのペニャの村まで逃げたが、真夜中、疲労困憊して寝ているところを身内の裏切りによって捕らわれた。

翌日の11月13日夜明け、トゥパク・カタリはロバの尻尾につながれて頭に茨の冠を載せられ手には藁の釋をしぼりつけられ、ペニャの広場に引き出された。そして舌を切られたうえ馬に四肢を引っ張られて四裂きにされ、切り落とされた頭と四肢はラパス、アヨアヨ、シカシカなどの村にさらされる。その後一カ所に集められて燃やされ、灰を風で吹き飛ばして何の痕跡も残らないようにされた。彼は最後に「私は殺される。だが明日には生き返り、その時には千人になっているだろう」という言葉を残し、それは後の社会運動のスローガンとしてよく使われた。

バルトリナは心理的拷問として夫の一部始終を全て聞かされ、その翌年彼女と同じように勇敢に戦った夫の妹、グレゴリア・アパサとともにラパスの広場で絞首刑にされた。その日、9月15日は『先住民女性の日』に制定され、彼女は全アメリカ大陸の先住民女性をつなぐシンボルとなった。バルトリナの長男が捕えられたという記録があり、殺されたと思われるが、他の子供たちは名を変えてひそかにどこかで育てられたのかもしれない。

(いとう しげこ)



バルトリナ像を除幕するエボ・モラーレス大統領  
<http://www.comunicacion.gob.bo/?q=20130823/12385>